2月25日(日)

江田島のナマコ漁に行ってきました！

江田島産

赤ナマコ 青ナマコ

数量限定

1パック

680円(税込)

この計画は1年前広告販売した、江田島の先輩の手作りサヨリ干しの広告から始まっておりました。

旦那さんが、ナマコ漁をしていると言う情報を聞き、「潜るんですか？」と言うと、「あんた本気？」と、言われた一言。「来年一緒にとりに連れてってあげよー」と言われ約束。そして、漁3日前、行く前から色々ラインで質問攻め。「質問多いわー」と、電話がかかってきました。1番の爆笑は、トイレの件。想像におまかせします(笑)。

当日大雨です。念の為先輩に確認し、「雨でもありますよね？」　すると、スタンプ1個のグッとサイン。今の時代これで十分伝わります。

朝5時、庄原を出発。フェリーにのり江田島へ。遠足気分のワクワク感。1人で海を眺めます。しかし5分後、車で爆睡(笑)。先輩と旦那さんと合流。数回しか会った事がない先輩ですが、とっても楽しい。

船に乗ると、大雨・激寒をイメージしたのですが、日頃のおこないがいいですね。雨も風もなく、上服6枚、カイロ4個、下3枚。ダルマ状態でしたが、逆に暑かったです。いつもはまだ寒いみたいです。冬に美味しい魚が食べれるのは、漁師さんのおかげですね。

今回のナマコ漁は、潜るのではないです。船の底に網をセット。ガァーと、船を動かしながらとっていく。それを見とくだけ(笑)。それを何回も繰り返します。網をあげると、藻とナマコ出して分別したりと大変。宝探しみたいです。船がたまに斜めになり、底に石などがあったら網が引っ張られるみたいで、「怖いですね。」と話していた時、かなり船が傾き、思わず先輩の腕を掴みました。先輩は、爆笑。恐怖体験。落ちるかと思い、その後は、すぐ浮輪の位置を確認。

今回赤ナマコのみの広告予定だったのですが、中々赤ナマコがとれず、青ナマコも販売します。自然相手は難しいですね。先輩は青ナマコの方が美味しいと言ってました。しかも今回のサイズがジャスト！小ぶりサイズ。切ってサッと湯をかけてポン酢。湯をかける事でやわらかくなり、臭みもおとすみたいです。

今回の漁で黒ナマコは沢山とれました。初めて見たのですが、全て加工商品にされるみたいです。ほんと真っ黒でした。

今が旬！江田島産 赤ナマコ、青ナマコと販売しております。

もちろん私がとったナマコです。是非皆さん味わってください。

西田鮮魚店　副店長　越道　裕子

西田鮮魚店

ジョイフル

☎72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489（旧庄原市内はご自宅に配達）

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

『庄原にスタバ？③』

鮮コーポレーション㈱　代表取締役会長　西田　昌史

「スタバをどこに作るの？」
実は、私が考えたのは『国営備北丘陵公園』の中。
ジョイフルから300メートルの公園北口。
『ふらり』のある建物だ。
ここに『スタバ』ができれば・・・・。
想像するだけでワクワクする。

しかし、『スタバ』だけでは人は呼べない。
『スタバ』は庄原にはないというだけで、今や全国に1900店舗もあるらしい。けっして、珍しいわけではない。
「スタバはないけど砂場はある」と知事が名言を残した鳥取県にさえ、今は4店舗あるという。
いくら景色がいいといったところで、さすがに『スタバ』があるからといって、わざわざ庄原にまで来る人は限られる。もちろん庄原に住む私たちだけでは商売にならない。わざわざ来てくれる人たちがいなくては・・・。
そこで『庄原市図書館』が必要になる。
『丘陵公園』の湖畔に建つ山小屋を思わせる図書館。広がる芝生の庭。そしてその先の豊かに水をたたえた国兼池。
半端でない量の蔵書。広い空間とたくさんの読書席。いっぱいに並ぶ絵本。読み聞かせの部屋。
そこに『スタバ』と『蔦屋書店』。いいねぇ。
これなら、人が来てくれる。わざに、庄原に足を運んでもらえる。じっさい、高梁市は、もう何年も、これでやってきている。公園じゃぁなく駅だけど。

しかし、ここで問題だ。
あたりまえだが図書館には利益がない。住民サービスの一環だ。建物を建てるのも、本を揃えるのも、そこで働く人たちの費用も、すべて、行政が負担する。言ってみれば税金でなりたっている。
私は『スタバ』と『蔦屋書店』の売上で、その行政（ここでいえば『市』だ）の負担を軽くしていると思っていた。しかし、どうも、そんな簡単な話ではないようだ。
考えてみれば『スタバ』はともかく『蔦屋書店』は新しい感覚で運営しているとはいっても本屋さんだ。
驚くほど利益の少ないのが本屋さんだ。大都会、しかも駅前のような、人が、わんさかいるような場所で営業して初めて成り立つ業種だろう。それが、人口3万だ4万だという田舎町で利益が出るとは思えない。『スタバ』でさえそうかもしれない。
まぁ、だから庄原には出店しないと誰もが思っているし、実際、出店しないのだが・・・。
それでも、高梁市には出店し、何年も運営されている。
言われたことがある。
「地方都市では、行政と民間が力を合わせなければ良い事業はできない」と。
高梁市では、『高梁市図書館』だけでなく『スタバ』と『蔦屋書店』の3つの事業を合体させることが、住民サービスと考えたのではないか。
『スタバ』と『蔦屋書店』は民間事業だから高梁市は関わりのないこと、という姿勢だったら、まちがいなく『スタバ』も『蔦屋書店』もできていないだろう。もっと言えば、あんなに開放的でかっこいい図書館にもなっていないだろう。
ここが大事だ。
行政だけではノウハウがない。民間だけでは採算があわない。力を合わせることだ。
最近知ったのだが、公共施設の運営には『指定管理制度』というものがあるらしい。くわしくは知らないから、説明は省くが、高梁市の場合も、この制度を使っていて、『蔦屋書店』なんかを経営している『カルチュア・コンビニエンス・クラブ（以下、CCC）』が指定管理者として運営しているのだと聞いた。
そうか、庄原市も、そう考えれば『スタバ』ができる。
先に書いたこととは違ってしまうが、合体するのは、別に図書館でなくてもいい。図書館はカネがかかるらしいし。ここは、『CCC』に知恵を借りて、高梁市とはまた違った人が集まる空間を創るという選択肢もある。

そもそも、こんなことを考え始めたのは『ジョイフル』の理事長になってからだ。
「新しいジョイフルをどうする？」。それが頭から離れなくなった。
そんなこんなの、ある日ある時、『CCC』の人の話を聞く会に呼ばれて行った。で、高梁市のことを聞いた。
聞くうち「丘陵公園に作ったら？」と思った。
『丘陵公園』は庄原の宝物だ。なのに、そこにあるだけ。私たちが公園を使いこなしているとはとうてい思えない。これだけの宝物を放っておくのは罪だ。常々そう思っていた。

『高梁市図書館』『蔦屋書店』『スタバ』。
なんども聞くうち、頭の中が固まっていった。
「そうじゃ、丘陵公園じゃ‼」。駅の代わりに公園。
それを聞いていた誠ちゃんが、会が終わって「昌史、それじゃ‼」と声を掛けてくれた。彼は続けた。
「国営備北丘陵公園は民営化することになっとるんじゃ」。
だからチャンスだと言う。
そういえば、中国新聞で読んだ覚えがある。
誠ちゃんの口から『PPP』『PFI』『コンセッション方式』という聞いたことのない言葉が飛び出す。難しすぎてわけがわからない。今もスマホで検索しながら書いている。
でも、要するに、高梁市のようなやり方のことだろう。
「餅は餅屋」とでもいえばいいか。
しかし、この民営化の流れは、誠ちゃんが言うように庄原の大きな、大きなチャンスだと私も思う。
『スタバ』ができる町にするのは、自分たちだ。

そんな私の頭に、今、浮かんでいるのは『庄原生鮮市場』。
ジョイフルが、道の駅のような生鮮市場として生まれ変わり、300m先のスタバのある、丘陵公園と繋がったら年間100万人（現在は50万人弱）のお客様を呼びこむことも夢ではない。

今はまだ私の勝手な妄想にすぎません。あしからず。
（続く）

国営備北丘陵公園『ふらり』

2024年2月25日